健康　くらし

女性を悩ます病気 <2>

卵巣のう腫　経過観察で正常化例も

3～6カ月置きに検診受けて

婦人科の検診を受けて、症状はないのに「卵巣のう腫」と告げられることがある。百合レディスクリニック（東京都）の丸本百合子院長は「いわゆる『卵巣のう腫』は良性です。心配することはありません」と明言する。

丸本院長は、いわゆる「卵巣のう腫」は、卵巣の「腫れ物」「できもの」と考えるといいと説明する。

多くの種類があるが、卵巣の中に血液や他の液体がたまった「のう胞」と、卵巣そのものできものである「腫瘍」に大別できる。腫瘍で悪性のものは卵巣がんだが、普通、卵巣のう腫と言う場合は、卵巣がんを指さない。

「のう胞」で多いのは、機能性のう胞だ。卵子を育て排卵する過程で、卵巣に卵胞液という液体がたまるが、それが多過ぎた状態などのことで、経過観察中に小さくなることが多い。血液がたまるものの代表には子宮内膜症によるものがある。

一方、「腫瘍」には、腫瘍の内容物に毛髪、骨、歯などが含まれるもの（皮様のう胞腫）、水溶性のもの、粘り気のある粘液などがある。

治療法は、子宮内膜症には薬があるが、普通は経過観察か手術のどちらかだ。卵巣が直径6センチ前後に大きくなり、下腹部に痛みがある、茎の部分がねじれて下腹部に激痛が起こるケースなどが手術の対象になる。

若い人では、癒着がなければ腫れている所だけを切り取る卵巣のう腫摘出術が一般的。閉経が過ぎた人は、再発防止と卵巣がんの予防も合わせて考え、病巣のある卵巣全体を取る卵巣摘出術を行うことが多い。

いずれの手術でも開腹手術と腹腔鏡手術がある。片方の卵巣を全部取っても反対側の卵巣が健康であれば、女性ホルモンの分泌も問題なく、妊娠にも支障はない。

丸本院長は「経過観察では3～6カ月置きに検診を受ける必要があります。検査予約までの途中で何か異常があったら、ためらわず早めに受診するといいでしょう」と助言している。